

# 医療と介護、地域包括ケアシステムの将来像

## 社会が求める理学療法士とは

公益財団法人 天理よろづ相談所  
法人企画準備室／白川分院 在宅世話どりセンター  
次長／医員 次橋 幸男

### 著者連絡先

所属 公益財団法人天理よろづ相談所 企画準備室・白川分院 在宅世話どりセンター

役職 次長・医員 氏名 次橋 幸男

郵便番号 〒632-8552 住所 奈良県天理市三島町 200 番地

TEL: 0743 (63) 5611

Email: [y.next.t@tenriyorozu.jp](mailto:y.next.t@tenriyorozu.jp)

日本では1947年から1949年に生まれた団塊世代が2025年には75歳を上回る。そして、85歳以上の人口が2020年の620万人から2035年には1000万人超まで増加すると推計されている。(1) また、世帯構造も大きく変化する。特に団塊世代が集中して住んでいる都市郊外において、後期高齢者世帯や独居世帯の増加が想定されている。(2) 85歳以上が増加する一方で、15歳から64歳の生産年齢人口は2020年から2035年にかけて12%近く減少する。つまり、急速な85歳以上人口の増加を限られた人的資源で支えるという状況が、近い将来に到来するのである。

このような状況の中、日本では中学校区圏域(又はより小さい圏域)において、医療・看護、介護・リハビリテーション、保健・福祉が一体的に提供される地域包括ケアシステムが構築されつつある。その中でも、在宅医療に対するニーズは85歳以上人口の増加とともに2035年から2040年頃まで増加し続けると予想される。また、これらの変化には地域差があることから、各地域の状況に応じた目標設定と地域マネジメントが求められている。(3) そして、医療機関(特に中小規模の病院)の役割も大きく変化する。奈良県では「面倒見のいい病院」機能として、地域包括ケアシステムを支える病院に求められる7つの領域(入退院支援・介護連携、在宅医療への支援、増悪患者の円滑な受け入れ、リハビリテーション、食事・排泄への取り組み、認知症へのケア、QOL・自己決定の尊重・支援)を指標化して、各機能の向上と医療機関同士の連携強化を目指している。これらの機能は地域社会が病院に求めるものであり、「面倒見のいい病院」は、全ての医療機関が2020年代に志向すべき中核的なコンセプトとなるだろう。(4)

上述のように、これまでは漠然とした概念であった地域包括ケアシステムが、全国各地における様々な取り組みを通じて、少しずつ具体化されてきた。今後は、各々の地域

において、地域の実情に応じた取り組みと持続的な改善が求められる。また、新たに顕在化してきた社会的課題への対策も、地域包括ケアシステムに内包されつつある。例えば、介護や障害福祉が一体となって全年齢層を支える地域共生社会の実現や、地域社会における孤立への対策（社会的包摂）といった、医療技術だけでは解決できない社会的課題への対策が含まれている。そのため、医療、介護や福祉といった制度の壁、病院と地域ケアなどの組織の壁、そして職域の壁を超えた地域内での連携が、全ての専門職に求められる。

理学療法士が提供するリハビリテーションの需要も、高齢者人口の増加とともに爆発的に高まることが予想される。したがって、様々な専門職の協力を得て、時には地域住民と協力して、より効率的で、より継続的な、そしてより多くの人々に良質なリハビリテーションを届けていく必要性が高まるだろう。最後に、これまでの議論をふまえて、社会が求める理学療法士を考える上で、私が重要だと考えている3つのメッセージをお伝えしたい。第一に、理学療法士だけではなく全ての医療介護専門職は、社会のニーズである「地域包括ケアシステム」の将来像を理解しておく必要がある。現在、日本ではほとんどの政策が「地域包括ケアシステム」を旗印に掲げているといっても過言ではない。そのため、大規模病院や専門性の高いリハビリテーションを提供している施設に勤務していたとしても、地域包括ケアシステムとの連携は必須となっている。第二に、自分たちの現状を客観的に評価することを心がけて頂きたい。その評価と目指すべき将来像とのギャップ（課題）を直視することによって、具体的な対策、改善策を考えやすくなる。なお、ここでの「自分たち」とは、自組織や自施設といった身近な集団に限っていない。社会に求められているニーズから逆算して、必要とあらば所属や職種の壁を越えたチームを構築することによって、真の意味での地域包括ケアを提供することができる。第三に、社会が求めるニーズに応え続けるためには、これまでの働き方や守備範囲を変えていく必要がある。もちろん、これまで理学療法士として習得してきた経験、知識、そして技術を基本としつつも、自らの働き方を変える、自らが変化となる覚悟が求められるだろう。

以上、地域包括ケアシステムの将来像と社会が求める理学療法士について、私見を含めて解説した。本講演が、皆様が「社会が求める理学療法士」像を考えるための一助となれば幸いである。

#### 【文献】

- (1) 国立社会保障・人口問題研究所. 日本の将来推計人口（平成 29 年推計）. URL: <https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Mainmenu.asp>
- (2) 地域包括ケア研究会. 2040 年：多元的社会における地域包括ケアシステム. URL: [https://www.murc.jp/sp/1509/houkatsu/houkatsu\\_01.html](https://www.murc.jp/sp/1509/houkatsu/houkatsu_01.html)
- (3) 田中滋:政策論としての地域包括ケアシステム, 地域包括ケアシステムの深化と医

療が支えるまちづくり．東京大学出版会，東京，2022，pp 3-21.

(4) 林修一郎：「面倒見のいい病院」指標，病院 79(2)：124-128，2020.